福井県郷土研究の動向

―昭和五五年―

舟　沢　茂　樹

昭和五五年も自治体史の編纂が各地で活発にすすめられ、一方では民間有志によって『奉答紀事―春嶽松平慶永実記』・『新訂越前国名蹟考』などの労作が出版された。

市町村の歴史資料館の建設ブームは昭和五三・五四年にそのピークに達したが、昭和五五年からは置県百年（昭和五六年）に照準をあわせた県の関係施設づくりがはじめられた。

県史編纂も軌道にのり県内外の研究者の交流・共同研究がさかんとなりその成果も着実に実を結んでいる。

これらのことを背景として昭和五五年の郷土研究の動向を分野別に要約してみたい。

一、市町村史

市史では敦賀市史・大野市史・小浜市史の三冊が、町村史では清水町史・河野村誌の二冊が刊行された。

『敦賀市史　史料編三』は松原・西浦両地区の史料を収録したもので、中世史料の多い西福寺文書や漁村史料に特色がある。また、この年より紀要『敦賀市史研究』も発行されることになった。

『大野市史二　諸家文書編一』は上庄・小山・五箇・西谷四地区の旧家五十余家の史料を年代順に編成している。太閤検地帳の豊富なことが特色である。

『小浜市史五　諸家文書編二』は旧西津・旧内外海両村の諸家文書を収め、回船・漁業関係史料に特色がみられる。

『清水町史下』は近現代の通史であるが、別編として史料集と文書目録を兼ねた『補遺』編も刊行された。

『河野村誌　資料編』は通史編に先行して出版され、同時に別編『河野村古文書目録』も刊行された。史料目録といえば今立町でも史料編に先立って『今立町史料目録』を出版した。三千八百点の史料が地域別・所蔵者別・編年順に収録されている。

最近の市町村史は上記のように史料編・史料目録を通史刊行以前に出版するようになったが、それだけ精度の高い通史編が期待できるわけで喜ばしい傾向といえる。なお、この年より三方・高浜・美山三町においても編纂に着手したことを付記しておく。

二、原始・古代・中世

〔原始〕　縄文のタイムカプセルとして注目されている鳥浜貝塚の第五次調査がはじまり、日本最古とみられる「なわ」や丸木舟の「かい」などが出土して話題を賑わしている。

〔古代〕　発掘調査の成果としては小浜市教委より『岡津製塩遺跡―第一次・第二次発掘調査報告』が刊行された。同遺跡は奈良時代における若狭で最大の製塩工場址であり、昭和五四年に国の史跡に指定された。

文献では白崎昭一郎『越前若狭の古代史』と小辻幸雄『越前若狭の古代』の二書が出版された。前書は文献史学と考古

学の成果を巧みに総合したもので、福井県における古代史研究の到達点を示す研究史ともいえる。後者は若越二国の古代史年表を集成した労作で、福井県古代史料の総索引としても活用できる。

〔中世〕　中世寺院址豊原遺跡の試掘調査の報告書が刊行された。本調査は昭和五五年夏に実施されたが、管理者の丸岡町では同遺跡を宗教公園として整備・保存をはかる方針であり、その基本構想が近藤公夫氏（奈良女子大教授）によって検討されている。

史料集としては『越前若狭一向一揆関係資料集成』が出版された。本書は県教委が昭和四八年より三ヶ年計画で県下全域の関係史料を調査したもので、久しくその成果の公刊が待望されていた。

三、近　世

鯖江藩間部家文書の編纂が昭和五三年より同家文書刊行会によってすすめられてきたが、全五巻の初巻が出版された。同文書は百七十年間にわたる藩庁日記や御用状（江戸・国元の家老間に交わされた書状控）がその中核となっているが、第一巻には宝永七年から享保五年までの御用状が収録されており、鯖江藩の成立過程がうかがえる。

福井藩士中根雪江晩年の著述『奉答紀事―春嶽松平慶永実記』（東大出版会刊）が中根雪江先生百年祭の事業として出版された。中根は、春嶽が福井藩主に就任以来一貫して側用人として補佐した人物で、幕末動乱期に活躍した春嶽と福井藩をしるための根本史料の一つといえよう。

中根と同じく福井藩士の著書として井上翼章の『越前国名蹟考』が再刊された。本書は明治三六年と昭和三三年の二回活字化されているが、今回の『新訂越前国名蹟考』（杉原丈夫校訂・松見文庫刊）は綿密に底本の選定を吟味した労作で、既刊本の欠を補って完璧を期している。

史跡では昭和五四年から発掘をはじめた小浜城の第一次調査の報告書が小浜城跡発掘調査団によって公刊された。近世城郭の大規模な調査として注目されているが、第一次調査の報告書は内堀の構造を中心にその成果の概要をまとめている。また、福井市では県立図書館の移転を契機として、隣接する江戸期の名園養浩館（お泉水庭園）の復元をはかるためその整備計画に着手した。

文化財調査では県教委が近世社寺建築の調査をはじめた。近世社寺は建築年代の新しさのためこれまでその調査がなおざりにされてきたが、それだけにその成果に期待したい。

四、近現代

県文化協議会では昭和三八年から同五四年にいたる本県文化の歩みを回顧して『福井県文化史』を刊行した。郷土史・美術・音楽・文学の動向が分野別に編年体で記されている。

『福井県地理学会五十年史』が出版された。本書は同会五十年の歩みの記録にとどまらずこの間に刊行された関係文献千九百点の目録を収録し、郷土研究の手引書としても活用できるように配慮されている。

五、施設

〔建設〕　県朝倉氏遺跡資料館が完成し

た。国の特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡では昭和四二年から発掘調査をはじめてこれまでに数万点におよぶ戦国期の貴重な出土品を得ている。その発掘成果を収蔵・展示する施設として設置されたのが同館である。また、同館には埋蔵文化センターが併設され現在建設中であるが、両施設が今後の越前地方における考古学研究の拠点となるものと期待されている。

置県百年を記念して県立博物館が建設されることになり、その基本構想と敷地（福井市大宮二丁目）が決定した。歴史・考古・民俗の文化遺産が調査・収集・保存・展示される施設として準備がすすめられている。

置県百年記念事業としては県立図書館の新館完成もあげられる。同館三階には郷土資料室が設けられ、同じ階には県史編さん室も開設された。郷土史研究のセンターとしての役割を果すことになろう。

〔企画展〕　県下各地の歴史館では春秋二季にわけて各種展覧会を開催した。春季企画展では『福井の屏風絵展』（県立美術館）・『近世衣裳展』（福井市歴史博物館）が開催された。前者では重要文化財の「日本図」「世界図」（福井市浄得寺蔵）や岩佐又兵衛「歌仙図」（大野市円立寺）などが展示され、後者では越前松平家伝来の衣裳類が公開された。秋季展では『天王陣屋特別展』（朝日町郷土資料館）・『越前の画人展』（福井市歴史博物館）・『幕末展』（鯖江市資料館）・『小浜祇園祭資料展』（小浜市郷土歴史資料館）が開催された。『天王陣屋展』では朝日町天王に陣屋を設けて越前内三万七千石の飛地を支配していた三河西尾藩松平家の関係史料が展示された。